ひかりの声が聞こえる

平凡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひかりの声が聞こえる

【Ｎコード】
Ｎ０７９２Ｘ

【作者名】
平凡

【あらすじ】
電車の事故により、特殊な病気を患った鷹霧と川口という少年２人の話。

雑談

『２０３０年あたりから、「空想上の病」とされている数々の病に非常に似た症状の報告がきこえるが、日本政府、及び国際保健機関は無視を続けている。』

学校からの帰り道の、長いくせにゆるい坂道を横ぎる交差点で、鷹霧優薫（たかぎりやさくに）は、友達の四谷（よつや）と、「謎の病」とかいうサブカル本を読んでいた。

「不死病（メモライズ）ってこれ、すげえな。」

あるページで四谷が言う。

「不死病（メモライズ）？・・・強いショックを受ける事で・・・・んーと、いち、じゅう、ひゃく・・・１千万人に一人の割合で発病。寿命が飛躍的に伸び、何をしても老衰（約３０００歳前後）まで死なない・・・うん、すげえ。」

この文を読みながら、鷹霧は、おそらく、この病気になりたいやつとなりたくないやつは、ぱっきり分かれるだろうな、と思った。

「ヤサはこれ、なりたい？」

四谷に訊かれ、「ぱっきり分かれる」とか思ったくせに、意外と答えを出すのに苦戦する。

昔の夢は「ふろうふし」だったのに。

音楽を聴きながら

川口一（かわぐちはじめ）は音楽を聴いていた。サカナクションを聴いていた。
隣で5組の四谷と鷹霧が何か本を読みながらしゃべっている。えらく興奮している。
「これはすごい。欲しい。」
とかなんとか四谷は言い、あわてて鷹霧が、「え、どれどれ」とか言っている。しばらく。
なんかガキみたい。そう思いつつも、耳はもはやサカナクションよりもそちらに傾いていた。
「・・・心読（ノイズ）病。あらゆる人の心の中を読むことができる。強いショックにより発病。又、その際につけていた物を事後に装着した時のみ発病する場合もある。5千万人に一人の割合で発病する。」
まず川口の脳にひらめいたのは「インサイダー」とかいう横文字だったが、やつらは「あいつの好きなやつとか一瞬でわかるじゃーん！」とか言ってる。
まったく。『全国統一中学生テスト2年の部』の全国4位がなにやってんだか。そろそろ行こうとしたところで考えた。
鷹霧優薫。あいつはこの学校でおそらく最も頭がいい。

馬鹿

結局、なにも答えられないまま、家についてしまった。呆然としながら廊下を歩く。

鷹霧は、３年前にこのマンションに引っ越してきた。札幌のなかでごちゃごちゃ動くのは嫌いだった。

それでも親は北区から豊平区に引っ越すと言った。

「だって南高が近いじゃない。」

知るかボケと思った。というかはっきりと口に出した。

で、この有様だよ。とちらりと窓を見る。

去年起こったインド洋沖大震災で、この札幌市で一番高級なマンションは、あっけなく耐震基準に引っかかったのであった。

その工事で、朝から晩まで雑音がひどい。

いまやその茶色い外見は、くすんだようにしか見えなかった。

そんな鬱な気分で、４１２号室についた。鬱というにはおおげさか。

一瞬でひとりぼっち

通学路に歩道は無かった。とぼとぼと、川口は道路の白線の上を、落ちないように歩いていた。

川口の通学路に、同じクラスのやつは他に1人しかいない。小学校が微妙な位置にあり、川口とそいつだけが切り離されたのであった。よって、いつも1人で帰っていた。

「今度遊ぼうな！」と、卒業式で川口に言ったやつは、スーパーで会っても、ぎろり、と川口を一瞬睨んだだけで、あの日の笑顔もなしにその日発売の週間少年漫画雑誌に目を戻した。袋の中の卵のパックが、かちゃりと音をたてた。

小名木（おなぎ）文房具店という、なにか買うたびに消しゴムをおまけする店を越えたあたりで、対向車線から、自転車が坂をのぼってきた。

あいつだ。

黒石健斗（くろいしけんと）。つぶらな、どこを見ているかわからない目。野球帽をかぶっていた。彼がただ一人の。噂の。あいつだ。

彼は、一瞬で川口の横を通過した。赤いスポーツタイプの自転車に乗っていた。

cross A

鷹霧は今日2軒目の塾のまっさい中だった。こんな感じで、毎日2〜3軒の塾をはしごするのが日課だった。

7：30に二次会は終わる。今は7：05分だ。ちくしょう、この約30分間が長いんだよ。ーそう思うのも日課の1つになっていた。

ぼんやりとベージュ色の壁をながめた。

三次会は8：30からで、それまでに3駅分の移動、そして夕食をとらなければいけなかった。木曜はフィレオ・フィッシュとジンジャーエールのセットと決めていた。

そして地下鉄は、レーザーガンのような音をたてながら、定時にきた。おまえも日課をこなす仲間だよ、とこっそり、しかしいつも彼にー地下鉄に愚痴をいった。アホじゃないかな、と思いながら。

座れるかな、と期待する。

そして鷹霧は、栄町行きの東豊線に乗った。

大通でおりるんだよな、といつものことを再確認した。

しかし鷹霧の日常は、ぐんにゃりと曲がることになった。たとえるなら、反比例のグラフのように。

cross B

川口はいつも寒色系の服を着ている。
だって俺が赤とか黄色とか似合わないし、だいいち気持ち悪い。
とひとりで理由づけした。そして、断定した。
ただ、今自分が着ている紫という色はどちらなんだ、と誰かにききたかった。だれにきくのだ。といわれると、すこし困るが。
今日は5日だった。１１月5日。
毎月5日は音楽雑誌の発売日だった。しかし、それを買うには札幌までいかないといけなかった。
「めんどくせえ」
そうつぶやきつつも、しっかりとすでに出かける準備はしていた。
7時もまわっていたので、食料を調達しないといけなかった。親は・・・といっても親父は川口が3歳のときに交通事故で死んでいた。母は習字教室だそうだ。
―なんか、さびしっ。と言ってから、なにいっちゃってんの。と苦笑いした。

それから川口が福住駅についたのは３０分後だった。遠いんだよ！と舌打ちした。
ここは終点なので、電車を待つことは少なかった。いまはその少ない1回だ。
駅は異様な静けさだったがそれを撃ち抜くかのように電子音がなり、地下鉄東豊線、栄町行きは来た。
7時４２分発だ。ここから札幌までざっと１５分。
しかし大幅に札幌につくのは遅れる事となった。

追加

地下鉄東豊線栄町行きが月寒中央駅で事故をおこしたのは１１月５日の７時４４分のことであった。

「んー、あいかわらずジャストだなあ。」

と、林（はやし）は苦笑いした。

「おい、君」と笑顔で、電車につっこんだ男に声をかける。一生きてんだろ？おまえ。

まあ今はそれどころじゃないや、ときょろきょろする。乗客は全員降りているはずだ。

ああ、いたいた。ふふふ、君はこんなときでもＭＵＳＩＣか。それに比べてそっちは割とミーハーだね。好きになるのはもっぱらくだらないアイドルでしょ。

さて、と。どう声をかければいいかなあ？

わからないし、うまくいく、という確信があったので、ストレートに言おう。

近づくと、明らかに彼は警戒していた。青のヘッドフォンを外して、言う。

「俺に何の用ですか」

「・・・君はいま、とっても困惑してるだろ？」

「そりゃ誰かわからない大人に声かけられたら、誰でも困惑しますよ。きっと。」

「そうゆうつまらない話じゃなくてさ。・・・・例えば、ぼくの名前をあててごらん？あたったらファンタ１本おごるけど。」

俺の名前は、林です。心のなかで、割とゆっくりと言う。さあ、どうだい？

「・・・」

「そのヘッドフォンをつけてみな。」

ごそごそと彼はヘッドフォンをつけて、間髪いれずに言った。

「・・・林さん、ですか？」
くっくっく、と笑いながら、正解だよ。という。
「やっぱりか。」と彼はいった。ため息つきで。
そうだよ。君は残念ながら心読者（ノイザー）になったんだ。と心のなかで言った。
ちょっとこっちに来てくれる？というと、いや、でも家が・・・と拒否した。
「大丈夫。僕の予想だと、今日は家にお母さんは帰ってこない。」
なぜわかるかって？僕は未来予知者（アンドロイド）だからね。
「もう1人いるんだよ。患者が今日は。」

混乱

「『この男は何を言っているのだ』っておもってるだろ。」と、名前は知らないが、なんとなく顔は見たことのある奴が、顎(あご)をウインドブレーカーに隠しながら言った。

はい、そうですとも。鷹霧はカフェオレ色のジャンバーのポケットに手をつっこみながら考えた。―こいつらは何者だ？

「ああごめん。僕は林。この子は・・・」

「川口です。」おのおの自己紹介され、しょうがないので鷹霧もしようとすると、

「めんどいならいいよ、鷹霧君。」

何故おれの名前を知っている。

「そりゃ警戒するよね」と、俺の心を読んだかのように、黒縁眼鏡の知らない男が言う。

はっきり言っちゃうとね、と。「僕は、ある程度先の未来のことがわかる、『不可視現実病(ファスト)』、簡単に言っちゃえば未来予知ができる、未来予知者(アンドロイド)なんだ。」

え。とまぬけな声を思わず出してしまう。なんじゃそりゃ。

「信じらんないよね。」と、へにゃへにゃため息するシーンは映画で何回も見た。そしてそのあと、そいつはこう言うんだ。

「けれども、」ほらね、やっぱり。

今度こそずばっと言います、と勝手に宣言してから、男は「君は、」とゆっくり言う。ごくり、と息を飲む。

「君は、不死病(メモライズ)っていう病気に、ていうか能力をつけちゃったっぽいんだよ。僕の未来だと。」

少しだけ睨む。

「はっきり言って」「信頼できない。」最後の部分はヘッドフォン野郎とハモった。ヘッドフォン野郎が「『ヘッドフォン野郎』はあんまりだ。」と、ぶつぶつ言ったが、今回はシカト。

ああああああああああああああっ！！なんなんだよこいつらはっ！！

子供

学校で見る温和な鷹霧が、あきらかに殺気をたてていた。なんていうか緑のオーラっぽい。

「君、いつもの退屈な生活にうんざりしてるだろう。」鷹霧は眉をひそめた。

たしかにそうだけどさあ。と、心のなかでいったようだ。へえ、そうなんだ。

「このビビリがっ！！」

「はあ！？」鷹霧ははっきりと声にだしていった。気分的には鷹霧の味方だ。今このタイミングで言うか！？それ。

と、突如「ぐう～」と漫画的表現なおなかの音がする。林だ。今このタイミングで鳴るか！？それ。

まあ、おなかもすいたし、座りながら話そうよ。とのんきに林はいう。確かに今までずっと駅構内で立ちっぱなしで川口も疲れていた。だいいち真横は事故現場である。渋々、というかんじで鷹霧も同意する。

「どこがいい？」

だからあんたはのんきすぎるんだよっ！！ガキかっ！！

結局、希望も特になかったので、そこらへんの喫茶店に入る。

自分と鷹霧はジンジャーエールで、林はオレンジジュースだ。今の子供はかっこいいもの飲むねえ、と林が苦笑いする。

「それで、だ。どうすんの？」まだドリンクも来てないのに。

「親が心配します。」と、まっとうな理由をつけて鷹霧が断る。

「きみの両親は今日、演劇を見にいってるはずだ。」勝ち誇ったように林が言う。案の定、なんでそれを、と焦っているようだ。顔にでてる。

焦る鷹霧か。いま俺めずらしいもん見たぞ。

sound

「ていうか、なんで僕、ビビリ扱いなんですか。」

静かに、しかししっかりと鷹霧は言った。どうやらさっきの林の発言にややご立腹のようだ。

「だって、現状に満足してないのに、そっから逃げてるってことは・・・ビビリでしょう？」

でも僕もあんまりひとのこと言えないんだけどね、と苦々しげに林はいった。

鷹霧はしたくちびるを噛んでいた。

ドリンクがきた。

けれども、気まずい間は続いて。

川口は無意識のうちにおしぼりをいじくっていた。だれかどうにかしてくれ。

今日。

ひとりごとのように林は言った。形容詞的には「寂しい」感じだ。林はどこか遠くを見ながら言う。

飛び込んだやつがいただろ？あいつはね、僕の患者のひとりなんだよ。

そこで彼はオレンジジュースを飲んだ。氷が、からんと音をたてる。

重いってのはこんな感じか。と、鷹霧までのんきなことをいいだす。

目の前のジンジャーエールがしゅわしゅわいっている。

彼のなまえはね、黒石護君（くろいしまもる）。かっこいい子でね、タレントやってたの。

過去形かよ。ヘッドフォンから鷹霧のこころのこえがきこえる。

ちょっと待て。黒石って今おまえいった？

まぬけ

つい2，3時間前に読んでいた本の話がリアルになるなんて、予想もしていなかった。この世界というものはずいぶん奇蹟とかいうやつがおこりやすいな、と鷹霧は思った。というか、半ば呆れていた。だいたい、予想できるやつなんているか？・・・おれの目の前でオレンジジュースをすすってるやつを除いて。

そいつは黒石の、黒石護の話の続きをした。―遠い目で。視線はちらちらとゆれていた。あきれているようにも、怒っているようにもみえた。

「彼がね、僕の患者さんになったのは、6年前のこと。ぼくはまだ23歳だったなあ。・・・意外とふけてるでしょ。びっくりした？」

そうゆうのいいからはやくつづけろ。29歳としての態度で。

「彼はね、卒業式ですっころんで発病することになってたんだよね。」

いやあ、見事なマヌケっぷりだったよ、と奴はにやにやした。というか、何の病気だ？

「安心して、彼はまだ死んじゃいない。・・・確実に。」

ごとり、と音がした。隣をみると、川口がヘッドフォンをおいている。

「・・・彼も、不死者（メモライザ）だ。」

おそろいだねえ、と林が軽く言う。

頼む、少し黙ってくれ。

不死者（メモライザ）いわれて、背中にいやな汗をかいているというのは、明らかに動揺している証拠だった。―おれはこの林とかいうちんちくりんな奴を信じるのか？・・・どうかしてる。

急にとなりの川口が、苦々しい顔でいう。

「黒石護は・・・黒石護には『健斗』という弟はいますか」

んー、とのんきにうなった林は、いるよ。とポケットからどんぐりが落ちたように云った。そのうえ、「たしか君の・・・ええと川口君の同級生でしょ」ともいった。

ため息をついた。ふたりとも。

そして俺は、残っていたジンジャーエールを一気に、ストローをつかわずにのみほした。

覚悟をきめた。

黒石家の庭は綺麗だろうか

黒石健斗にかかわってはいけない。そう思った。
黒石健斗はいつでも中2だというのに純白のブリーフで、すごくわかりやすいマザコンだ。そして何かつぶやいている。
その内容は、つい5秒前に覚えた言葉か、中2病的な技の名前だった。
どうしよう。このつぶやきが、突如として「お兄ちゃん」とかいいはじめたら泣いてしまいそうでふるえる。
俺は、川口は小3から人前では泣かなくなっていた。のにもかかわらず、だ。
林がぼんやりと言う。
「黒石護が自殺未遂を仕掛けたのはこれで6・・・いや7回目なんだよね。でそれで治療費とかが結構やっぱりかかるらしいよ。」
鷹霧君はこうなっている現状を知っているだろうか。今はトイレに行っているが。
彼はトイレに行く寸前、
「じゃああなたを信じてみます。」
といってトイレに行った。
訳もなく、財布を手でもてあそんでいた。
店の奥にあるトイレから鷹霧がでてきた。
「じゃあ行こうか。」
林がレジへ向かった。なんとなく気まずくて、鷹霧の方を盗み見したら、目があった。

顔

店から出て、果てしなく続くのではないか、というほどの長い、そしてまっすぐな地下街を深夜に歩いていた。男三人が約３ｍ間隔で列をなしていた。かなりｓｔｒａｎｇｅな光景であっただろう。

いい加減夜である。地下街はシャッターがおり、人は一人で無表情で歩いていた。この人達は何を考えているのだろう、と３ｍ先をゆく川口を見るが、ノーリアクションだ。

シャッターとシャッターのすきまほどの、地上に出るための階段があった。少し冷んやりとした空気が流れている。

ずいぶん急な階段だ。思わず無言になる。・・・いや、正確には店をでてから一言もしゃべっていない。

膝がわらう。ふと上方を見上げると林が出口で立ち止まっていた。驚く事に顔が笑っていない。

今にやにやしないでいつするんだよ！とひとりでイラっとする。

風は冷たかったが、空は澄んでいて、冬が近いことを匂わす。

駐車場はそこから2分ほどで、真っ赤なスポーツカーが一台だけ停まっている。・・・冗談だろ？

いまさら林がにやにやしている。

なんでついて来たんだろ、俺。

くるまのなか

川口は目を見開いた。目の前には真っ赤なスポーツカー。
おいおい、嘘だろ？
「まあ乗ってよ。」
林はにやにやしながら言う。どうやら心の中では「どやどやどやどや・・・・」と流れているようだ。
・・・別に自慢してもいいけど事故だけはおこしてくれぬな、と思いつつその真っ赤なドアに触れた。が、あわてて手をひっこめる。
そうこうしているうちに、あっさりと鷹霧は車に乗っている、というのを乱暴に閉まるドアの音で知った。え、ためらいとかない訳？
二人は後部座席に乗って、それぞれ窓の外を見ていた。
ばん。と所有者である林も乱暴にドアを閉めて。
「しゅっぱーつ！」
と林一人だけテンションを上げて車は走りだした。

どれくらいたったであろう。車は住宅街を走っていた。車の中は場違いにも、ｔｈｅ　ｔｅｌｅｐｈｏｎｅｓでノリノリだった。車の中の空気は凍りついている。
そんな空気の中、おれは「ＫＹって何年前の言葉だっけ」とぼんやり考えていた。
そして、なんでおれはこの男を信用し、その車の中にいるのだろう、と思った。普通の人なら、鷹霧のような反応だろう。
「あと１５分ぐらいでつくよ。」
林が唐突に言ったので、おれは悲鳴をあげそうになった。

その訳を

車は、ややくすんだビルの前で止まった。「土佐田ビル」と書いているようだ。

「こん中に僕の病院がある訳よ。」

え、病院だったの？と一瞬思うが、本人がそう言っているのでそうゆう事にしとこう、と鷹霧は思った。正確には、ただ、めんどくさかった。

隣を見ると、川口も微妙な顔をしていた。

三人はビルの中に入った。中もホコリくさい。

三階が林の「病院」らしかった。ただ、雰囲気は「病院」というより、ただ単に応接室である。

適当に革のソファーに座る。ん！？

「ああごめん。ほら、おととい雨だったでしょ。」

そう言って林は鷹霧の尻の下から靴下を救出した。もはや苦笑いだ。

川口は隣でずっと耳にヘッドフォンを押し付けるようにしてうずくまっている。指間からもれるヘッドフォンの青。

林がカフェオレを持って来たタイミングで、声を出す。

「約束どうり、この病気のことを詳しく教えてください。」

まあ、約束なんかしてないんだけどね、と林がブツブツ言っているのは聞こえていたが、「自分に都合の悪いことは聞かなかったことにする」というモットーの元、却下する。

珍しく林が困っている。珍しくと言っても、まだ会って数時間だが。

「そこ、めんどくさがらないで下さいよ。」

がばっと川口が起き上がり、言う。まっすぐに林を睨んでいる。

「だって話すこと多いからさあ。」

そんな理由、クソだ。いいかげん怒るぞ。

熟した後は腐るだけ

ぼりぼりと頭をかきながら、林はたった今自分で運んできたカフェオレを一気に飲むと、部屋の奥の方に消えた。

川口がほっ、と息をはく。疲れた。

それに合わせるかのようなタイミングで、鳩時計が鳴く。０：００。

鷹霧はぼけっと、そしてじいっとカフェオレを見ている。どうやら東京に演劇を観に行った親を心配しているらしい。

えらいわねぇ。彼は今までで何回こう言われたんだろう。俺の何倍だ？

林が戻ってきた。

「Ａの話とＢの話、どっちがいい？」

「ＡもＢも何も、選べと言われても困ります。」

鷹霧が至極真っ当な抗議をする。だけども、さ。

「Ａはクスリの話。Ｂは敵の話。」

俺はココロが読めるってことを忘れないでほしいな。

ん、いや待てよ？あいつの神的な脳だ、さりげなく俺を避けようとしたのか？え、ひょっとして・・・嫌われてる？

川口一。名前は簡単で、七画しかないのに、やたらと物事を複雑に考えようとする。俺の悪い癖だ。

会話は続いている。

「大したことないのは？」

「・・・クスリかなぁ？・・・うん、クスリだね。じゃあクスリの話からしようか。」

そう一方的に言うと、林はポケットからフリスクケースのようなものを出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0792x/

ひかりの声が聞こえる

2011年12月4日02時53分発行